

病原体の侵入 警告物質

タンパク質「セマフォリン」

大阪大発見 「花粉症治療に活用」

体内に病原体が侵入したとき、攻撃を担当する免疫細胞に危険を

知らせる鍵となるタンパク質をマウスを使った研究で発見したと、大阪大免疫学フロンティア研究センターが30日付の米科学誌ネイチャーイムノロジー電子版に発表した。

タンパク質は「セマフォリン」。免疫細胞のTリンパ球があるリンパ節まで、危険の命令役となる樹状細胞が移動するための「道案内」をする。

センターの熊ノ郷淳教授は「セマフォリンの働きを抑えれば、関節リウマチや花粉症、アトピーなどの疾患、がん転移など細胞の移動がかかわる病気の治療につながる。逆に働

きを強めれば免疫反応も強められ、ワクチンの効果を高められる」としている。

海外復興支援 「官民連携を」

治療実績を報告

広島でシンポジウム

国際協力シンポジウム「世界の中の日本の役割〜災害復興と国際貢献」(シンポ実行委員会主催)が30日、広島市中区の中国新聞ホールで開かれ、約100人が参加した。基調講演では、陸上自衛隊第13旅団(広島

県海田町)後方支援隊の白川誠隊長が、1月に大地震が発生したハイチで約3千人を治療した実績を報告。ハイチで活動する国際医療ボランティア団体AMDA(本部・岡山市北区)の菅波茂代表は「非政府組織(NGO)と自衛隊が協力し、災害現場で何ができるかをもちと考え、日本として国連に伝えるべきだ」と訴えた。続いて3人がパネル討論した。中国四国防衛局の中村範明局長は「自衛隊は大量の組織を投入できる一方、N

GOのような迅速な活動は不得意」と述べ、官民連携の必要性を強調。菅波代表は「自衛隊にはトイレや手術室を造るなど大がかりなことをやってほしい」と要望した。

広島大学院国際協力研究科の平川幸子准教授は、官民が連携する

るための「窓口」づくりを急ぐよう国に求めた。(永山啓一)